

# カンボジア自立支援

昨年春から、帰還難民の自立のために水田耕作用に牛を貸与するプロジェクトへの参加を皆様にお願ひしましたところ、130人を超える方が申し込んでくださいました。その方たち呼びかけて6月末から7月のカンボジアの田植え時を選んで農民の方たちとの交流にできました。

## 牛は農民に希望を与えていた

荒川千恵子 牛のプロジェクトリーダー

今回の旅を一言で言えば、それは驚きと感動と戸惑いと困惑の玉手箱だった。驚きさせられることが多い上に、問題があまりやりに大きく難しくて、私の内裏でもちもやしているのがある。

この旅で我山の人がここに出会って多くのことを知る事ができただけで、その中でとても印象的でもちもや有意義だったのは、いよいよ牛に出会った瞬間だった。コンボチュン省の農村に入ったその日、村人たちの集会の後、ひとりの女性が一頭の牛を撫でてながら、今後生まれる子どもは自分のものにならないのだと、はにかみながら自問に似てくさる。それはとてもうれしそうに見えた。彼女の持ち主としてその様子を見ていた期間、牛が人たちにとてもどんなものが理解できたような気がした。

今回のメインイベント、農業体験は照りつる太陽の下での田植えだった。それは本当に楽しい思い出になった。いつの間にか1ヘクタールある田んぼが人と笑い声でいっぱいになっていった。人と牛一緒にいるのがこんなにも気持ちよく感じたことがあっただろう。村の人たちともにもっといっしょに暮らす、邪魔なかもしれないけれど、遠く日本からの参観に面がけで付き合ってくれたのだろう。みんな笑顔でうさなまをいたよって、つらい仕事の合間のちょっとしたレクリエーションと楽しみになったとし

たら幸いだ。

一畝の田を植え終えて私たちが休んでいる間も、響き渡るいざ下りの田では、学校は午前中だったのでも子供も加わって村人総出の苗とらから田んぼまで駆けこんで来た。牛を押して田を起し、漕いだ後でもすべて手作業。見てるだけで大変さ伝わってくる。そしてその結果の収穫は、なんと日本の十分の一だから、青背と比べて、太い苗が密に生えている田んぼからはとても僅じられる数字にため息が出た。

ミレーの絵を彷彿とさせるこんな風景はほんとう美しく、近代化によって日本の農業とわたしたちが失ったものと、その代償に手に入れたものを思ひ出させる。この矛盾は克服できないものかと悩む、農作業に向かう途中、農村滞在を、農作業のために選択をつとめてくれた現地スタッフの青年が密かに、しみじみと言った。

"like looking farmers working in the field." 朝日をあびた彼らの顔がすがすがしかった。わたしには平和を象徴する言葉に聞こえた。

この国では現在、公務員の給料も一律、国民に納税の義務はないが医療費は無料。国は観光事業と外国からの無条件投資に頼って経済発展をなそうとしているのが、国民の生活環境を改善していくことが、いずれ日本をはじめ周辺諸国の大資本の手が、この手付かずの田んぼにもひびくのだろう。貧困と重労働は解決されなければならないが、あののどかで豊か自然と、それとの共生が破壊されるようなことになってはならない。そのためにも経済的な自立生活に向かふ不可だ。

農夫でもあるLWSの現地スタッフのひとりが、「トラクターがない、でもわいわ

れはあまりにも貧乏すぎる」と、また、通訳の青年が「Cambodia is poor, Japan is rich.” という言葉を何度も口にしたが、貧困とその背景の深刻さに打ちめされそうになるのをくらえたいのかのようだった。それは決してグチつたり、ひげだつたり、なんだりするものではない。絶望的な状況のなかでがんばらざるを得ない心情のとうして受け止めたが、これにはなんと応えていいのか、とまどうばかりだった。つらかった。

こんなつらさ状況のなかでいった村の人やLWSのスタッフの皆さんの温かい聲やかさだった。わたしは一行も帰って、最終帰郷的な表情しか見ることがなかった。みなさんと共に過ごせたこの旅は本当に素晴らしい。思い出するたびに不思議な心地よさがよみがえってくる。



牛の乳搾りを見せてもらって



途中で立ち寄った小学校。右が2人目、知れん

が検診されています。これは、現金収入を得られるような小きな高床（たえばら）を飼って卵や肉を産む。豚を育てる。お惣菜を売る。など）を始めるとこの援助者のためです。また、種畜まで食べつくすような収得確保前の生活の早い時期に、高利貸（月利25%など）といふ利息をとるのも少しくないようです）に頼らなくてよいようにする、などの目的をもっています。わたしも、なんらかの協力ができれば幸いです。

牛の支給を受けた家族とロムサム（右から2人目、女性職員センターの主任）とアムサム（右端、わかちあいプロジェクトの副コーディネーター）



今回の訪問で知り得たそのプロジェクトの一つとして、農民が小口の資金を借りられるようになる「村の銀行」プロジェクト

## わかちあいプロジェクト募金

# ●カクマ難民キャンプの小児病棟を！ ●「牛の銀行（牛の支給プロジェクト）」と「村の銀行」の資金のため

### 小児病棟建設に参加しよう。

ケニア北西にあるカクマ難民キャンプには、10年におよぶスーダン内戦によるスーダン難民3万3千人を中心に、エチオピア、ウガンダ、ザイール、ソマリア、ルワンダ、ブルンジからの難民、あわせて4万人の人たちが生活しています。このキャンプの最大の特徴は、18才未満の子供が、全体の40%を超えて多く、特に内戦の犠牲となった孤児1万人が共同生活していることです。

1992年にキャンプが設置されたとき緊急に病院も建設されましたが、難民の数が増加し、施設が手狭になり、新しい病院の建設が計画されています。

私たちは、そのうちで、小児病棟の建設と小児用のベットなどの備品購入の建設を引き受けることに募金を呼びかけます。ご協力のほどよろしくお願ひいたします。

また、来年の夏も日本から青年をカクマに派遣して小児病棟建設のボランティアに参加する計画です。

### 小口の資金でカンボジアの農民の生活を支えよう。

私たちは途上国の貧しい人たちの自立のための支援として「トリクルアップ・プログラム」(Newsの2号、3号参照)

このような売場を始めるにも資金が必要ですよ



現地の小児病棟



やバングラデシュの「グラミン銀行」について学んできました。カンボジアの現地と協力して新しいプロジェクトとして「村の銀行」ができないうちに、以前から相談してきました。

1995年から、LWSも従来中央政府を中心に行う協力から村に、村人を相手に、農業、教育、水、衛生など総合的な開発プロジェクトを行うように方針を転換し、そのために首都のプノンペンに加えてコンボチュン省の村にも事務所を設置しました。

そこで私たちが参加する具体的な協力として牛の銀行といふものにもつと小口の資金を貸し出す「村の銀行」を行うことにいたしました。たとえば、村の人たちが行うさまざまな現金収入につながる事業、ひよこを育てて育てて卵をとるが、始められるように支援したいと考えています。

トリクルアップの場合などは100ドル（約1万円）を1事業の単位として、世界各地で支援しています。私たちは1万円を単位に皆さまのご協力を得られたいと思います。牛の支給プロジェクトのようにコンボ

### 1996年の募金目的と目標額

- カクマ難民救済 450万円
  - 小児病棟の建設費と備品費・ワークキャンプ諸費用・古着などのコンテナ費用
  - 自立支援 450万円
- カンボジア帰還難民のための牛の支給プロジェクト・「村の銀行」の資金として
- その他

**募金目標額 900万円**  
**募金の送先**  
 郵便振替口座  
 わかちあいプロジェクト募金  
 00130-7-782258

## 牛の支給現地視察報告

橋本純 わかちあいプロジェクトスタッフ

10月27日より11月1日まで、牛の支給プロジェクトに対する視察訪問ボランティアの視察を実施しに視察するためにカンボ

ジアを訪問しました。おもにプノンペンから車で2時間ほどのLWSコンボチュン省の事務所所滞し、付近の農家や学校を訪問、見学しました。その帰り入りを12月から1月にひかえ水田耕作と広がる街並みに、ゆひかな農家と感じました。これは帰還難民や、あるいは現地でも手売った家庭に合った生活の生活のきびがは相当のよさだと思います。

30日からは、牛の支給プログラムに賛同して寄付をくださった東京豊島区オリーブクラブの代表のかたがとも合流し、牛の

## お知らせ

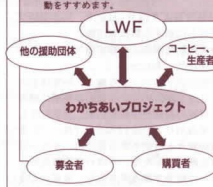
- わかちあいプロジェクト例会 8月を除く毎月、第3火曜日、午後7時より例会を開催しています。また、毎週、火曜日は集まり、仕事をしていますので、一度いらしてください。
- カクマ難民キャンプ写真展と報告会（農田区、主催、後援） 写真展：12月21日～28日 区役所1階アトリウム 区役所、山パライセイビル 会堂室
- カクマ難民キャンプ・ワークキャンプ報告会（参加者7名共催、B5 3 3 5 1） カクマ難民キャンプ情報レポート（安原院編集、B5 5 5 3 5 1） 関心のある方は、実費で

送りたいです。切手500円を同封の上、お申込ください。

●カンボジア長期ボランティア（1年）募集 募集要項をホームページでご確認ください。 ●朝の朝買店「おさらすーつ」開店！ (Tel:03-3987-6482) さる11月1日、港発サンシャインビル、インポートマーケット6階に開店、好評です。店の販路を行うグループにお個人が出資して会社をつくりました。わかちあいプロジェクトと協力した私たちのコーヒー、紅茶を販売しています。

LWF LWS (グローバル連携推進、世界平和)の助成、第二次大戦後の国際社会、東洋の文化の交流を目的とし、国際社会の一歩を踏み出すために国際社会の発展を支援する(NGO)です。現在、世界5ヶ所に事務所をもち、国際社会の発展に貢献しています。

わかちあいプロジェクトは、募金と製品販売収入を車の両輪として、支援活動をすすめています。



発行所 わかちあいプロジェクト 130 東京都墨田区江東橋 5-3-1 電話：03-3634-7809 FAX: 03-3634-7808  
 編集者 松木 保 郵便振替口座：わかちあいプロジェクト募金 00130-7-782258 (募金用)  
 わかちあいプロジェクト 00180-6-758331 (代金支払用)